

間引菜

泉鏡太郎

青空文庫

わびしき……侘しいと言ふは、寂しさも通越し、心細さもあきらめ氣味の、げつそりと身にしむ思の、大方、かうした時の事であらう。

——まだ、四谷見つけの二夜の露宿から歸つたばかり……三日の午後の大雨に、骨までぐしよ濡れに成つて、やがて着かへた後も尚ほ冷々としめつぽい、しよぼけた身體を、ぐつたりと横にして、言合はせたやうに、一張差置いた、眞の細い、乏しい提灯に、頭と顔をひしと押着けた處は、人間唯髯のないだけで、秋の蟲と餘りかはりない。

ひとへに寄りすが、薄暗い、消えさうに、ちよろ／＼また／＼……燈と言つては此一點で、二階も下階も臺所も内中は眞暗である。

すくなくも、電燈が點くやうに成ると、人間は横着で、どうしてあんなだつたらうと思ふ、が其はまつたく暗かつた。——實際、東京はその一時、全都が火の消えるとともに、此の世から消えたのであつた。

大焼原の野と成つた、下町とおなじ事、殆ど麴町の九分どほりを焼いた火の、やゝしめり際を、我が家を逃れたまゝの土手の向越しに見たが、黒煙は、殘月の

したに、半天を蔽うた忌はしき魔鳥の翼に似て、焼残る炎の頭は、その血のしたゝる七つの首のやうであつた。

……思出す。……

あらず、碧く白き東雲の陽の色に紅に冴えて、其の眞黒な翼と戦ふ、緋の鶏のときかに似たのであつた。

これ、夜のあくるにつれての人間の意氣である。

日が暮れると、意氣地はない。その鳥より一層もの凄しい、暗闇の翼に蔽はれて、いま燈の影に息を潜める。其の翼の、時々どつと動くとともに、大地は幾度もぴりぴりと揺れるのであつた。

驚破と言へば、駈出すばかりに、障子も門も半はあけたまゝで。……框の狭い三疊に、件の提灯に縫つた、つい鼻の先は、町も道も大きな穴のやうに皆暗い。——暗さはつきぬけに全都の暗夜に、荒海の如く續く、とも言はれよう。

蟲のやうだと言つたが、あゝ、一層、くづれた壁に潜んだ、波の巖間の貝に似て居る。

——此を思ふと、大なる都の上を、手を振つて立つて歩いた人間は大膽だ。

鄰家はと、穴から少し、恚う鼻の尖を出して、覗くと、おなじやうに、提灯を家族

で袖そでで包つんで居ゐる。魂たましひなんど守しゆご護するやうに――

たゞ四角よつかどなる辻つじの夜警やけいのあたりに、ちら／＼と燈ひの見みえるのも、うら枯がれつゝも散ちり残こつた百日紅ひやくじつこうの四五輪しごりんに、可おそろし恐ゆふだちくもい夕立雲ゆふだちくもの崩くづれかゝつた状さまである。

と、時々とき／＼その中なかから、黒くろく抜ぬけだして、蹺あしおと音を沈しづめて來きて、門かどを通とほりすぎるかとすれば、閃々きら／＼と薄すくきやうなものが光ひかつて消きえる。

白刃しらばを提さげ、素槍すやりを構かまへて行ゆくのである。こんなのは、やがて大叱おほしかられに叱しかられて、束たばにしてお取とり上げに成なつたが……然さうであらう。

――記録きろくは慎つしまなければ成ならない。――此このあたりで、白刃しらばの往わう來らいするを見みたは事實じじつである。……けれども、敵かたきは唯ただ、宵闇よひやみの暗くらきであつた。

其その暗夜やみよから、風かぜが颯さつと吹ふき通とほす。……初はつ嵐あらし……可なつかし懐あきい秋こゑの聲こゑも、いまは遠とほく遙はるかに隅田川すみだがはを渡わたる數萬すまんの靈れいの叫けう喚わんである。……蟬せみ燭そくがじり／＼とまた滅め入いる。

あ、と言いつて、其その消きえかゝるのに驚おどろいて、半なかばうつゝに目めを開ひらく、女をんなたちの顔かほは蒼あを白しろい。

疲つかれ果はてて、目めを睜みはりながらも、すぐ其それなりにうと／＼する。呼い吸きを、燈ともに吸しはるゝやうに見みえる。

がさり……

裏町、表通り、火を警むる拍子木の音も、石を嚙むやうに軋んで、寂然とした、臺所で、がさりと陰気に響く。

がさり……

ねずみ
鼠だ。

「叱……」

がさり……

いや、もつと近い、つぎの女中部屋の隅らしい。

がさり……

「叱……」

と言ふ追ふ聲も、玄米の粥に、罐詰の海苔だから、しつこしも、粘りも、力もない。

がさり。

畜生、……がさくと引いても逃げる事か、がさりとばかり悠々と遣つて居る。氣に成るから、提灯を翳して、「叱。」と女中部屋へ入つた。が、不斷だと、魑魅

を消す光明で、電燈を燦と點けて、畜生を磔にして追拂ふのだけれど、此の燈の覺束なきは、天井から息を掛けると吹消されさうである。ちよろりと足許をなめられはしないかと、爪立つほどに、心が虚して居るのだから、だらしはない。

それでも少時は、ひつそりして音を潜めた。

先づは重疊、抗つて齒向つても來られようものなら、町内の夜番につけても、竹箒を押取つて戦はねば成らない處を、恚う云ふ時は敵手が逃げてくれるに限る。

「あゝ、地震だ。」

幽ながら、ハツとして框まで飛返つて、

「大丈夫々々。」

ほつとする。動悸のまだ休まらないうちである。

がさり。

二二三尺、今度は——荒庭の飛石のやうに、包んだまゝの荷がごろ／＼して居る。

奥座敷へ侵入した。——此を思ふと、いつもの天井を荒るのなどは、もの

數ではない。

既に古人も言つた——物之最小而可憎者、蠅與鼠である。蠅以癢

鼠はぎつ以もつて黠。其その害ものを物が則がい鼠する過はず於み鼠はへに。其その擾ひと人を則み蠅だす過はず於み鼠はへに……し
 かも驅はへを蠅を難はねず於み驅を鼠を。——鼠ねずみを防ふぐことは、虎とらを防ふぐよりも難かたい……と言いふの
 である。

同感どうかんだ。——が、満まん更げん然ぜんううでもない。大たい家か高かう堂だう、手てが屈くかず、従したがつて鼠ねずみも多おほけれ
 ばだけれども、小ちひさな借しやく家かで、壁かべの穴あなに氣きをつけて、障しやうじ子しの切きり張ばりさへして置おけば、
 化ばけるほどでない鼠ねずみなら、むぎとは入はひらぬ。

いつもは、氣きをつけて居ゐるのだから、臺たい所どころ、もの置おきは荒あらしても、めつたに疊たみは踏ふま
 せないのに、大おほ地ち震しんの一ひと搖ゆれで、家うち中ちゆう、穴あなだらけ、隙すき間まだらけで、我わが家かの二にかい階かいでさへ、
 壁かべ土つちと塵ほこり埃すゐと煤すすと、襖ふすま障しやうじ子しの骨ほねだらけな、大おほきなものを背せ負おつて居ゐるやうな場ばあひ合あひだつ
 たから堪たまらない。

「勝手かつてにしる。——また地ち震しんだ。……鼠ねずみなんか構かまつちや居ゐられない。」
 あくる日ひ、晚ばん飯めしの支したく度ど前まへに、臺だい所どころから女ぢやちゆう中ちゆう部べ屋やを掛かけて、女をんなたちが頻しきりに立たち迷まよ
 つて、ものを搜さがす。——君くん子しは庖ほう廚ちゆうの事ことになんぞ、關くわんしないで居ゐたが、段だん々くちや茶ちやの間に
 成なり、座ざ敷しきに及およんで、棚たな、小こ棚たなを搔かきまはし、抽ひき斗だしをがたつかせる。棄すてても置おかれず、
 何どうしたと聞きくと、「どうも變へんなんですよ。」と不ふ思し議ぎがつて、わるく眞ま面め目めな顔かほをする。

ハテナ、小倉の色紙や、鷹の一軸は先祖からない内だ。うせものがした處で、そんなに騒ぐには當るまいと思つた。が、さて聞くと、いや何うして……色紙や一軸どころではない。——大切な晩飯の菜がない。

車麩が紛失して居る。

皆さんは、御存じであらうか……此品を。……あなた方が、女中さんに御祝儀を出してめしあがる場所などには、決してあるものではない。かさく〜と乾いて、渦に成つて、稱ぶ如く眞中に穴のあいた、こゝを一寸束にして結へてある……瓦煎餅の氣の抜けたやうなものである。粗と水に漬けて、ぐいと絞つて、醤油で搔せば直ぐに食べられる。……私たち小學校へ通ふ時分に、辨當の菜が、よく此だった。

「今日のお菜は？」

「車麩。」

と、からかふやうに親たちに言はれると、ぷつとふくれて、がっかりして、そしてベそを搔いたものである。其癖、學校で、おの〜を覗きつくらする時は「蛇の目の紋だい、清正だ。」と言つて、負をしみに威張つた、勿論、結構なものではない。

紅葉先生の説によると、「金魚麩は婆の股の肉だ。」さうである。

なるほどに
成程似て居る。

安下宿の菜に此の一品にぶつかると、

「また婆の股だぜ。」

「恐れるなあ。」

で同人が嘆息した。——今でも金魚麩の方は辟易する……が、地震の四日五日

めぐらる迄は、此の金魚麩さへ乾物屋で賣切れた。また一泉の干瓢鍋か。車麩か

。「と言つて友だちは嘲笑する。けれども、淡泊で、無難で、第一儉約で、君子

の食ふものだ、私は好だ。が言ふまでもなく、それどころか、椎茸も湯皮もない。金

魚麩さへないものを、些とは増な、車麩は猶更であつた。

……すでに、二日の日の午後、火と煙を三方に見ながら、秋の暑さは炎天より意地

が悪く、加ふるに砂煙の濛々とした大地に莫塵一枚の立退所から、軍のやうな人ご

みを、抜けつ、潜りつ、四谷の通りへ食料を探しに出て、煮染屋を見つけて、崩れた

瓦壁泥の堆いのを踏んで飛込んだが、心あての昆布の佃煮は影もない。鯨を見着け

たが、買はうと思ふと、いつもは小清潔な店なんだのに、其の硝子蓋の中は、と見ると

ギョツとした。眞黒に煮られた鯨の、化けて頭の飛ぶやうな、一杯に跳上り飛

る蠅であつた。あをく光る奴も、パツ／＼と相まじはる。

咽喉どころか、手も出ない。

蠅も蛆も、とは、まさか言ひはしなかつたけれども、此の場合……きれいな汚いなんぞ勿體ないと、立のき場所の周圍から説が出て、使が代つて、もう一度、その佃煮に駈けつけた時は……先刻に見着けた少しばかりの罐詰も、それも此も賣切れて何にもなかつた。——第一、もう店を閉して、町中寂然として、ひし／＼と中に荷をしめる音がひしめいて聞えて、鎖した戸には炎の影が暮れせまる雲とともに血をそぐやうに映つたと言ふのであつた。

繰返すやうだが、それが二日で、三日の午すぎ、大雨に弱り果てて、まだ不安ながら、破家へ引返してから、薄い味噌汁に蘇生るやうな味を覺えたばかりで、罐づめの海苔と梅干のほか何にもない。

不足を言へた義理ではないが……言つた通り干瓢も湯皮も見當らぬ。ふと中六の通りの南外堂と言ふ菓子屋の店の、この處、砂糖氣もしめり氣も鹽氣もない、からりとして、たゞ箱道具の亂れた天井に、つゞみ紙の糸を手繰つて、くる／＼とりさうに、右の車麩のあるのを見つけて、おかみさんと馴染だから、家内が頼んで、一かゞり

無理に譲つて貰つたので——少々おかゝを驕つて煮た。肴にも菜にも、なかゝ此の味は忘れられない。

——此の日も、晩飯の樂みにして居たのであるから。……私は實は、すき腹へ餘程こたへた。

あの、昨夜の（がさり）が其れだ。

「鼠だよ、畜生め。」

それにしても、半分煮たあとが、輪にして雑と一斤入の茶の罐ほどの嵩があつたのに、何處を探しても、一片もないどころか、果は踏臺を持つて來て、押入の隅を覗き、縁の天井うらにつんだ古傘の中まで搔きさがしたが、缺らもなく、粉も見えない。

「不思議だわね。變だ。鼠ならそれまでだけれど……」

可厭な顔をして、女たちは、果は氣味を悪がつた。——尤も引續いた可恐さから、些と上ずつては居るのだけれど、鼠も妖に近いのでないと、恚う吹消したやうには引けさうもないと言ふので、薄氣味を悪がるのである。

「何うかして居るんぢやないか知ら。」

追つては、置場所を忘れたにしても、餘りな忘れ方だからと、女たちは我と我身をさへ覺束ながつて氣を打つのである。且つあやかしにでも、憑かれたやうな暗い顔をする。その目の色のたゞならぬのを見て、私も心細く寂しかつた。いかに、天變の際と雖も、麩に羽が生えて飛ぶ道理がない。畜生、鼠の所業に相違あるまい。

この時の鼠の憎さは、近頃、片腹痛く、苦笑をさせられる、あの流言蜚語とかを逞しうして、女小兒を脅かす輩の憎さとおなじであつた。……

……たとへば、地震から、水道が斷水したので、此邊、幸ひに四五箇所残つた、むかしの所謂、番町の井戸へ、家毎から水を貰ひに群をなして行く。……忍ち女には汲ませないと言ふ邸が出来た。毒を何うとかと言觸らしたためである。其の時の事だ。……近所の或邸へ……此の界限を大分離れた遠方から水を貰ひに来たものがある。来たものの顔を知らない。不安の折だし、御不自由まことにお氣の毒で申し兼ねるが、近所へ分けるだけでも水が足りない。外町の方へは、と言つて其の某邸で斷つた。——あくる朝、命の水を汲まうとすると、釣瓶に一杯、汚い獸の毛が浮いて上る……三毛猫の死骸が投込んであつた。その斷られたものの口惜まぎれの惡戯だらうと言

ふのである。——朝の事で。……

すぐ其の晩、辻の夜番で、私に慙う言つて、身ぶるひをした若い人がある。本所から辛うじて火を免れて避難をして居る人だつた。

「此の近所では、三人死にましたさうですね、毒の入つた井戸水を飲んで……大變な事に成りましたなあ。」

いや何うして、生れかゝつた嬰兒はあるかも知らんが、死んだらしいのは一人もない。「飛でもない——誰にお聞きに成りました。」

「ぢき、横町の……何の、車夫に——」

もう其の翌日、本郷から見舞に來てくれた友だちが知つて居た。

「やられたさうだね、井戸の水で。……何うも私たちの方も大警戒だ。」

實の處は、單に其の猫の死體と云ふのさへ、自分で見たものはなかつたのである。

天明六、丙午年は、不思議に元日も丙午で此の年、皆虧の蝕があつた。

春よりして、流言妖語、壯に行はれ、十月の十二日には、忽ち、兩水道に毒ありと流傳し、市中の騷動言ふべからず、諸人水に騒ぐこと、火に騒ぐが如し。——と此の趣が京山の（蜘蛛の絲卷）に見える。……諸葛武侯、淮陰侯にあらざ

るものの、流言の智慧は、いつも此のくらの處らしい。

しかし五月蠅いよ。

鐵の棒の杖をガンといつて、尻まくりの逞しい一分刈の凸頭が一麴町六丁目が焼とるで！ 今ぱつと火を吹いた處だ、うむ。」と炎天に、赤黒い、油ぎつた顔をして、目をきよろりと、肩をゆがめて、でくりと通る。

一 晩内へ入つて寝たばかりだ。皆ワツと言つて駈出した。

「お急きなさるな、急くまい。……いま火元を見て進ぜる。」

と町内第一の古老で、紺と白の浴衣を二枚重ねた禪門。豫て禪機を得た居士だと言ふが、悟を開いても迷つても、南が吹いて近火では堪らない。暑いから胸をはだけて、尻端折りで、すたくと出向はれた。かへりには、ほこりの酷さに、すつとこ被をして居られたが、

「何の事ぢや、おほ、成程、焼けとる。※と火の上つた處ぢやが、焼原に立つとる土藏ぢやて。あのまゝ駈つても近まはりに最う焼けるものは何にもないの。おほ、安心々々。」

それでも、誰もが、此の御老體に救はれた如くに感じて、盡く前者の暴言を怨

だ。——處で、その鐵棒をついた凸がと言ふと、右禪門の一家、……どころか、忤な

のだからおもしろい。
 文政十二年三月二十一日、早朝より、乾の風烈しくて、盛の櫻を吹き亂し、花

片とともに砂石を飛ばした。……巳刻半、神田佐久間町河岸の材木納屋から火を發し

て、廣さ十一里三十二町半を焼き、幾千の人を殺した、橋の焼けた事も、船の焼

けた事も、今度の火災によく似て居る。材木町の陶器屋の婦、嬰兒を懷に、六歳

になる女、兒の手を曳いて、凄い群集のなかを逃れたが、大川端へ出て、うれしや

と吻と呼吸をついて、心づくつと、人ごみに揉立てられたために、手を曳いた兒は、身なし

に腕一つだけ残つた。女房は、駭きかなしみ、哀歎のあまり、嬰兒と其の腕ひとつ

抱きしめたまゝ、水に投じたと言ふ。悲惨なものあれば、船に逃れた御殿女中が、三

十幾人、帆柱の尖から焚けて、振袖も褌も、炎とともに三百石積を駈けまは

りながら、水に紅く散つたと言ふ凄慘なものもある。その他、殆ど今度とおなじやうなの

が幾らもある。中には其のまゝらしいのさへ少くない。
 餘事だけれど、其の大火に——茅場町の髮結床に平五郎と言ふ床屋があつて、

人は皆彼を（床平）と呼んだ。——此が焼けた。——時に其の頃、奥州の得平と言

ふのが、膏藥かうやくの呼賣よびうりをして歩行あるいて行おこなはれた。

(奥州あうしゅう、仙臺せんたい、岩沼いはぬまの、得平とくへいが膏藥かうやくは、

あれや、これやに、利きかなんだ。

あかぎれ
輝あかぎれなんどにや、よく利きいた。)

そこで床平とこへいが、自分じぶんで焼やけあとへ貼はりだ出したのは――

(何どうしよう、身代しんだい、今いまの間に、床平とこへいが恚かう焼やけた。

水みづや、火消ひけしぢや消きえなんだ。

暁あけがた方がたなんどにや、やつと消きえた。)

行やつたな、親方おやかた。お救すくひまい米いを噛かみながら、江戸兒えどっこの意氣思いきおもふべしである。

此このおなじ火事くわじに、靈岸島れいがんじまは、かたりぐさにするのも痛いた々々くしく憚はげられるが、あはれ、

今度こんどの被服廠ひふくしやうあとで、男女だんぢよの死體したいが伏ふし重かさなつた。こゝへ立たつたお救すくひこや小屋こやへ、やみ

の夜よは、わあツと言いふ泣聲なきごゑ、たすけて――と言いふ悲鳴ひめいが、地ちの底そこからきこえて、幽靈いうれい

が顯あらはれる。

しきりもない小屋内こやうちが、然さらぬだに、おびえる處ところ、一いち齊ときに突伏つツぶす騒さわぎ。やゝ氣きの確たしかな

のが、それでも僅わづかに見留みとめると、黒髮くろかみを亂みだした、若い女わかをんなの、白しろい姿すがたで。……見みるまに影かげ

になつて、フツと消える。

その混亂のあとには、持出した家財金目のものが少からず紛失した。娯樂ものの講談に、近頃大立ものの、岡引が、つけて、張つて、見さだめて、御用と、捕ると、其の幽霊は……女い女とは見たものの慾目だ。實は六十幾歳の婆々で、かもじを亂し、白ぬのを裸身に卷いた。——背中に、引剥がした黒塀の板を一枚背負つて居る。それ、とくるりと背後を向きさへすれば、立處に暗夜の人目に消えたのである。私は、安直な巻莨を吹かしながら、夜番の相番と、おなじ夜の彌次たちに此の話をした。

三日とも経たないに……

「やあ、えらい事に成りました。……柳原の焼あとへ、何うです。……夜鷹より先に幽霊が出ます。……若い女の眞白なんぞ。——自警隊の一豪傑がつかまへて見ると、それが婆だ。かつらをかぶつて、黒板……」

と、黄昏の出會頭に、黒板塀の書割の前で、立話に話しかけたが、こゝまで饒舌ると、私の顔を見て、變な顔色をして、

「やあ、」

と言つて、怒つたやうに、黒板塀に外れてかくれた。
 實は、私は、此の人に話したのであつた。

こんなのは、しかし憎氣はない。

再び幾日の何時ごろに、第一震以上の揺かへしが来る、その時は大海嘯がとも
 なふと、何處かの豫言者が話したとか。何の祠の巫女は、焼のこつた町家が、火に成つ
 たまゝ、あとからあとからスケートのやうに駈かる夢を見たなぞと、聲を密め、小鼻を
 動かし、眉毛をびりりと舌なめずりをして言ふのがある。段々寒さに向ふから、火のつ
 いた家のスケートとは考へた。……

女小兒はそのたびに青く成る。

やつと二歳に成る嬰兒だが、だゞを握ねて言ふ事を肯かないと、それ地震が来るぞと
 親たちが怯すと、

「おんもへ、ねんね、いやよう。」

と、ひいゝ泣いて、しがみついて、小さく成る。

近所には、六歳かに成る男の兒で、恐怖の餘り氣が狂つて、八疊二間を、縦と
 も言はず横とも言はず、くるゝ駈かつて留まらないのがあると聞いた。

スケートが、何うしたんだ。

我聞く。——魏の正始の時、中山の周南は、襄邑の長たりき。一日戸を出づる

に、門の石垣の隙間から、大鼠がちよろりと出て、周南に向つて立つた。此奴が

角巾、帛衣して居たと云ふ。一寸、靴の先へ團栗の實が落ちたやうな形らし

い。但しその風、丰は地仙の格、豫言者の概があつた。小狡しき目で、じろりと視て、

「お、お、周南よ、汝、某の月の某の日を以て當に死ぬべきぞ。」

と言つた。

したゝかな妖である。

處が中山の大人物は、天井がガタリと言つても、わツと飛出すやうな、やにツ

こいのは、口惜しいが鍛錬が違ふ。

「あゝ、然やうか。」

と言つて、知らん顔をして澄まして居た。……言は些となまぬるいやうだけれど、そこ

が悠揚として迫らざる處である。

鼠還穴。

その某月の半ばに、今度は、鼠が周南の室へ顯はれた。ものゝしく一揖して、

「お、お、周南よ。汝、月の幾日にして當に死ぬべきぞ。」
 と言つた。

「あゝ、然やうか。」

鼠が柱に隠れた。やがて、呪へる日の、其の七日前に、傲然と出て來た。

「お、お、周南よ。汝、旬日にして當に死ぬべきぞ。」

「あゝ、然やうか。」

丁度七日めの朝は、鼠が急いで出た。

「お、お、周南よ。汝、今日の中に、當に死ぬべきぞ。」

「あゝ、然やうか。」

鼠が慌てたやうに、あせり氣味にちか寄つた。

「お、お、周南、汝、日中、午にして當に死ぬべきぞ。」

「あゝ、然やうか。」

其の日、同じ處に自若として一人居ると、當にその午ならんとして、鼠が、幾度か出

たり入つたりした。

やがて立つて、目を尖らし、しやがれ聲して、

「周南、汝、死なん。」

「あゝ、然やうか。」

「周南、周南、いま死ぬぞ。」

「然やうか。」

と言つた。が、些とも死なない。

「弱つた……遣切れない。」

と言ふと齊しく、ひつくり返つて、其の鼠がころつと死んだ。同時に、巾と帛が消えて散つた。魏の襄邑の長、その時思入があつて、じつと見ると、常の貧弱な鼠のみ。周南、壽。と言ふのである。

流言の蠅、蜚語の鼠、そこらの豫言者に對するには、周南先生の流儀に限る。

事あつて後にして、前兆を語るのは、六日の菖蒲だけれども、そこに、あきらめがあり、一種のなつかしみがあつて、深切がある。あはれさ、はかなさの情を含む。

潮のさゝない中川筋へ、夥しい鯔が上つたと言ふ。……横濱では、町の小溝で鯔が掬へたと聞く。……嘗て佃から、「蟹や、大蟹やあ」で来る、聲は若い、もういゝ加減な爺さんの言ふのに、小兒の時分にやあ兩國下で鰯がとれたと話した、私は地震の

當日、ふるへながら、「あゝ、こんな時には、兩國下へ颯が來はしないかな。」と、愚にもつかないが、事實そんな事を思つた。

あの、磐梯山が噴火して、一部の山廓をそのまゝ湖の底にした。……その前日、おなじ山の温泉の背戸に、物干棹に掛けた浴衣の、日盛にひっそりとして垂れたのが、しみ入る蟬の聲ばかり、微風もないのに、裾を翻して、上下にスツくと煽つたのを、生命の助かつたものが見たと言ふ。——はもの凄。

慥うした事は、聞けば幾らもあらうと思ふ。さきの思出、のちのたよりに成るべきである。

ところで、私たちの町の中央を挟んで、大銀杏が一樹と、それから、ぼぶらの大木が一幹ある。見た處、丈も、枝のかこみもおなじくらゐで、はじめは對の銀杏かと思つた。——此のぼぶらは、七八年前の、あの凄じい暴風雨の時、われ／＼を驚かした。夜があけると忽ち見えなく成つた。が、屋根の上を消えたので、實は幹の半ばから折れたのであつた。のびるのが早い。今では再び、もとの通り梢も高し、茂つて居る。其の暴風雨の前、二三年引續いて、兩方の樹へ無數の椋鳥が群れて來た。時に枝を争つて、揉抜かれて、一羽バタリと落ちて目を眩したのを、水をのませていきかへらせて、

そして放した人があつたのを覚えて居る。

見事に群れて来た。

以前、何かに私が、「田舎から、はじめて新橋へ着いた椋鳥が一羽。」とか書いたのを、紅葉先生が見て笑ひなすつた事がある。「違ふよ、お前、椋鳥と言ふのは群れて来るからなんだよ。一羽ぢやいけない。」成程むれて来るものだと思つた。

暴風雨の年から、ぼつたり来なく成つた。それが、今年、しかもあの大地震の前の日の暮方に、空を波のやうに群れて渡りついた。ぼぶらの樹に、どつと留まると、それからの喧噪と言ふものは、——チチツ、チチツと百羽二百羽一度に聲を立て、バツと梢へ飛上ると、また颯と枝につく。揉むわ揺るわ。漸つと梢が静まつたと思ふと、チチツ、チチツと鳴き立てて又バツと枝を飛上る。暁方まで止む間がなかつた。

今年は非常な暑さだつた。また東京らしくない、しめり氣を帯びた可厭な蒸暑さで、息苦しくして、寝られぬ晩が幾夜も續いた。おなじく其の夜も暑かつた。一時頃まで、皆戸外へ出て涼んで居て、何と言ふ騒ぎ方だらう、何故あゝだらう、烏や梟に驚かされるたつて、のべつに騒ぐ譯はない。塙が足りない喧嘩なら、银杏の方へ、いくら分れたら可ささうなものだ。——然うだ、ぼぶらの樹ばかりで騒ぐ。……银杏は星

空らに森然しんとして居あた。

これは、大袈裟おほげさでない、誰も知しつて居ある。寝ねられないほど、ひつきりなしに、けたましく鳴立なきたてたのである。

朝あさはひつそりした。が、今こんど度は人間にんげんの方が聲こゑを揚あげた。「やあ、荒あらもの屋やの婆ばあさん。

……何どうでえ、昨夜ゆうべの、あの椋鳥むくどりの畜生ちくしやうの騒さわぎ方は——ぎやあく、きいく、ばたく、ぎツく、騒さう々々しくつて、騒さう々々しくつて。……俺等おいらら晝間ひるま疲つかれて居あるのに、

からつきし寝ねられやしねえ。もの干棹ほしぎをの長ながい奴やつを持出もちだして、搔かきまして、引拂ひつばたかうと

思おもつても、二本にほん繼ついでも届とどくもんぢやねえぢやあねえか。樹きが高たかくつてよ。なあ婆ばあさん、

椋鳥むくどりの畜生ちくしやう、ひどい目めに逢あはしやがるぢやあねえか。」と大聲おほこゑで喚わめいて居あるのが

よく聞きえた。まだ、私わたしたち朝飯あさめしの前まへであった。

此これが納をさまると、一ひと時ときたりきつて、樹きも屋根やねも搔かきみだすやうな風雨あめかぜに成なつた。驟雨しゅううだから、東京中とうきやうちゆうには降ふらぬ處ところもあつたらしい。息いきを吐つくやうに、一度いちど止とんで、しばらく

ぴつたと静しづまつたと思おもふと、絲いとを揺ゆつたやうに幽かすかに來きたのが、忽たちまち、あの大地震おほぢしんであつた。

「前兆ぜんてうだつたぜ——俺おらあ確たしかに前兆ぜんてうだつたと思おもふんだがね。あの前まへの晩ばんから曉あけ方がたまで

の椋鳥むくどりの騒さわぎやうと言いつたら、なあ、婆ばあさん。……ぎやあくぎやあく夜よつび一夜だ。――
 ―お前まへさん。……なあ、婆ばあさん、荒あらもの屋やの婆ばあさん、なあ、婆ばあさん。――
 氣きの毒どくらしい。……一いち々く、そのほぶらに間ま近ちかく平屋ひらやのある、荒あらもの屋やの婆ばあさんを、辻つじ
 の番小ばんご屋やから呼よび出だすのは。――こゝで分わかつた――植木屋うゑぎやの親おや方かただ。へゞれけに酔よ拂ぼら
 つて、向むか願うは卷まきで、鋏くはの抜ぬけた柄えの奴やつを、夜警やけいの得えものに突張つツりながら、
 「なあ、婆ばあさん。――荒あらもの屋やの婆ばあさんが、知しつてるんだ。椋鳥むくどりの畜生ちくしやう、もの干ほしぎ
 棹をで引搔ひきかき、いてくれようと、幾度いくんど飛出とびだしたか分わからねえ。樹きが高たけえから届とどかねえぢやあ
 りませんか。然さうだらう、然さうだとも。――なあ、婆ばあさん、荒あらもの屋やの婆ばあさん、なあ、
 婆ばあさん。――」
 ふりす鋏くはの柄えをよけながら、いや、お婆ばあさんばかりぢやありません、皆みなが知しつてるよ、
 と言いつても酔よつてるから承知しやうちをしない。「なあ、婆ばあさん、椋鳥むくどりのあの騒さわぎ方は。――」
 ―と毎まい晩ばんのやうに怒鳴どなつたものである。
 ……話はなしが騒さわ々々しい。……些ちと靜しづかにしよう。それでなくてさへのぼせて不可いけない。あゝ、
 しかし陰氣いんきに成なると氣きが滅入めいる。

がさり。

また鼠だ、奸黠なる鼠の豫言者よ、小畜よ。

さて、車麩の行方は、やがて知れた。魔が奪つたのでも何でもない。地震騒ぎの
らくただの、風呂敷包を、ごつたにした、か積重ねた床の奥の隅の方に引込んで
あつたのを後に見つけた。畜生。水道が出て、電燈がついて、豆腐屋が来るから、
もう氣が強いぞ。

……齒がたの着いた、そんなものは、掃溜へ打棄つた。

がさり。がらくらく。

あの、通りだ。さすがに、疊の上へは近づけないやうに防ぐが、天井裏から、臺
所、鼠の殖えたことは一通りでない。

近所で、小さな兒が、おもちゃに小庭にこしらへた、箱庭のやうな築山がある。

——其處へ、午後二時ごろ、眞日中とも言はず、毎日のやうに、おなじ時間に、縁の
下から、のそくと……出たな、豫言者。……灰色で毛の禿げた古鼠が、八九
疋の小鼠をちよろくと連れて出て、日比谷を一散步と言つた面で、桶の輪ぐらゐ
に、ぐるりと一巡二三度して、すまして又縁の下へ入つて行く。

「氣味が悪くて手がつけられませんか。」

「地震以來、ひとを馬鹿にして居るんですな。」

と、その親たちが話して居た。

「……車麩だつてさ……持つて来たよ。あの、坊のお庭へ。——山のね、山のまほりを引張るの。……車の眞似だか、あの、オートバイだか、電車の眞似だか、ガツタン、ガツタン、がう……」

と、その七つに成る兒が、いたいけにまた話した。

私も何だか、薄氣味の悪い思ひがした。

蠅の湧いたことは言ふまでもなからう。鼠がそんなに跋扈しては、夜寒の破襖を何うしよう。

野鼠を退治するものは狸と聞く。……本所、麻布に續いては、この邊が場所だつたと

言ふのに、あゝ、その狸の影もない。いや、何より、こんな時の猫だが、飼猫などは、

此の頃人間とともに臆病で、猫が（ねこ）に成つて、ぼやけて居る。

時なるかな。天の配劑は妙である。如何に流言に憑いた鼠でも、オートバイなどで

人もなげに駈られては堪らないと思ふと、どしん、どしん、がらくがらくと天井

越前國 大野郡の山家の村の事である。春、小正月の夜、若いものは、家中みな遊びに出た。爺さまも飲みに行く。うき世を済ました媼さんが一人、爐端に留守をして、暗い灯で、絲車をぶうくと、藁屋の雪が、ひらがなで音信れたやうな昔を思つて、絲を繰つて居ると、納戸の障子の破れから、すき漏る風とともに、すつと茶色に飛込んだものがある。白面黄毛の不良青年。見紛ふべくもない鼬で。木尻座の筵に、ゆたかに、角のある小判形にこしらへて積んであつた餅を、一枚、もろ手、前脚で抱込むと、ひよいと翻して、頭に乗せて、一つ軽く蜿つて、伸びざまにもとの障子の穴へ消える。消えるかと思ふと、忽ち出て来て、黙つて又餅を頂いて、すつと引込む。

「おゝゝ悪い奴がの……そこが畜生の淺ましざちや、澤山然うせいよ。手を伸ばいて障子を開ければ、すぐに人間に戻るぞの。」と、媼さんは、つれ／＼の夜伽にする氣で、巧な、その餅の運び方を、ほくそ笑をしながら見て居た。

若いものが歸ると、此の話をして、畜生の智慧を笑ふ筈が、豈計らんや、ベソを搔いた。餅は一切もなかつたのである。

程たつて、裏山の小山を一つ越した谷間の巖の穴に、堆く、その餅が蓄へてあつた。鼬は一つでない。爐端の餅を頂くあとへ、手を揃へ、頭をならべて、幾百か列をなし

たのが、一息に、山一つ運んだのであると言ふ。洒落れたもので。

……内に二三年遊んで居た、書生さんの質實な口から、然も實驗談を聞かされたのである。が、聊か巧に過ぎると思つた。

後に、春陽堂の主人に聞いた。——和田さんがまだ學校がよひをして、本郷彌生町の、ある下宿に居た時、初夏の夕、不忍の蓮も思はず、然りとて數寄屋町の婀娜も思はず、下階の部屋の小窓に頬杖をついて居ると、目の前の庭で、牡鶏がけた、ましく、鳴きながら、羽を煽つて、ばたくと二三尺飛上る。飛上つては引据ゑらるゝやうに、けたましく鳴いて落ちて、また飛上る。

講釋師の言ふ、槍のつかひてに呪はれたやうだがと、ふと見ると、赤煉蛇であらう、たそがれに薄赤い、凡そ一間、六尺に餘る長蟲が、崖に沿つた納屋に尾をかくして、鎌首が鶏に迫る、あます處四五寸のみ。

和田さんは蛇を恐れない。

遣り放しの書生さんの部屋だから、直ぐにあつた。——杖を取るや否や、畜生と言つて、窓を飛下ると、何うだらう、たゞきもひしぎもしないうちに、其の蛇が、ぱつと寸々に斷れて十あまりに裂けて、蜿々と散つて蠢いた。これには思はず度肝を抜か

れて腰こしを落おとしたさうである。

が、蛇へびではない。這はつて肩かたぐるま車ました、鼬いたちながの長ながい列れつが亂みだれたのであつた。

おほのおほの話はなしも領なづかれて、そのはたらしきも察さつしらるゝ。

かの、(リノキ、チツキテビー)よ。わが鼬いたち將しやう軍ぐんよ。いたづらとりに鳥とりなど構かまふな。

コブラコブラを咬かみ倒たふしたあとは、希ねがくは鼠ねずみを獵かれ。蠅はへでは役やく不ぶ足そくであらうも知しれない。きみは

獸ぢうちう中はの隼やぶさである。……

大正十二年十一月

青空文庫情報

底本：「鏡花全集 卷二十七」岩波書店

1942（昭和17）年10月20日第1刷発行

1988（昭和63）年11月2日第3刷発行

※題名の下にあった年代の注を、最後に移しました。

※表題は底本では、「間引菜《まびきな》」とルビがついています。

入力：門田裕志

校正：川山隆

2011年8月14日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

間引菜

泉鏡太郎

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>